翻刻紹介

『人相小鑑大全』（上）巻一～巻二

浜田泰彦・河戸愛実

〔抄　録〕

貞享元（一六八四）年八月に刊行された喜多村江南軒『人相小鑑大全』は、中国由来の和刻本を除けば、我が国史上初の漢字仮名交りの整版本観相書である。

日本の観相学史上重要な書物であり、さらには近世文芸にも少なからず影響を与えたにもかかわらず、本書はこれまで翻刻がそなわっていない。そこで本稿では、『人相小鑑大全』全四巻の内巻一～二を翻刻・紹介する。

キーワード　観相書、ほくろ、版本

はじめに

江戸時代の版本は、儒学・仏教・神道等の学問諸領域のみならず、文学の諸ジャンルに至るまで、有用・無用を問わず多彩で広範な領域をカバーしていた。夢占・易占・手相書・観相書等占術に関連する書物もまた江戸時代を通して大量に刊行されていた。今日では、占術の言説は、科学的根拠を持たず、学問領域の対象外と見なされるのが一般的になっている。一方で、江戸時代では占術もまた学問の一領域を占めるものと認識されていた。

たとえば、石門心学者の鎌田一窓（虚白斎）が著した心学書談義本『売卜先生糠俵（こぬかたわら）』（安永六（一七七七）年五月刊）では、筮竹を手にした売卜先生が、悩みや疑問を抱えて次々とやって来る老若男女を「其次は誰じや」の一声で迎えつつ、矢継ぎ早に解決していく。ただし、売卜先生はいたずらに筮竹に運命を委ねる易者ではない。最初に先生のもとを訪れた女性が、器量は良いが生計を立てるに難のある男か器量に難があるが質素倹約を守る男のいずれに嫁ぐか占って欲しい

と相談すると、先生は親の考えを糺す。

「はい親達は、質素な方を望なれど、私が顔を見て、縁の道ばかりは、押付けられぬ。其方の心次第と有る故に、私も心も迷ひ、占に任する気。」

翁目に角立て曰、

「卜は以て疑を決す。疑はざるに何ぞトせん。同じ路二筋有つて、問ふ人も無く、知らざるときは、トうて天に任す。一筋道に卜は入らぬ。此縁組に畳算も入る物歟。縁の道ばかりは押付けられぬなどゝは、親達も親達、育が悪い。《後略》」[1]

売卜先生は、「トう」までもなく、親の指示通りに質素倹約を旨とする男の方と縁組を結び、親孝行せよと、この後告げる。このように、江戸時代における易者は、非科学的な扱いを受けたどころか庶民に敬慕される知識人であった。

近世の文芸作品中においても占術は重要な位置を占めており、近年では再検討の対象ともなっている。一例を挙げれば、上田秋成『雨月物語』（安永五・一七七六年刊）巻之三「吉備津の釜」は、正太郎と磯良の婚姻が吉備津神社の釜占いと陰陽師の占いとが的中して破綻する章段であるが、近衛典子氏により、中西敬房『夢卜輯要指南』（宝暦四・一七五四年序）中の「屋宅諸怪占」の記事が、磯良が正太郎を襲撃する場面で発せられる不思議な光に関与していることが明らかにされている。[2] 後述するが、これまであまり顧みられなかった占術書が文学作品を解釈が明らかになる源泉となる可能性はこの一例にとどまらないだろう。

このような問題意識から、近世の観相書にも注目が集まりはじめている。「観相」とは、「人の身体・容貌・声・気色を観察して、その性質・禍福を見通すこと」[3]を指す。古くは中国の春秋時代に遡及される人相見に関連する書物は江戸時代の初期より刊行されていたが、その刊行の実態が青山英正氏の研究[4]により明らかにされている。

二、『人相小鑑大全』の概要と文学作品への影響

青山氏稿「近世日本観相書版本目録」[5]によると、陳希夷伝・袁柳荘訂『神相全編』の和刻本が慶安四（一六五一）年九月に刊行をみたのが、観相書版本の端緒である。浅井了意『安倍晴明物語』（寛文二（一六六二）年正月刊）「人相巻上・下」（巻六～七）の人相見の記事の大半は『神相全編』に拠っていることは既に指摘がそなわる。[6] ただし、「人相巻」は本書の「おまけ」[7]に過ぎず、作品全体は観相書を内容としていない。したがって、寛永頃（一六二四-四五年）に古活字版で刊行された『人相経』を除けば、本稿で紹介する貞享元（一六八四）年八月に刊行された『人相小鑑大全』は、史上初の整版本観相書である。

その多くを『神相全編』に拠っている『安倍晴明物語』「人相巻」に対し、『人相小鑑大全』は別系統の本文に拠っているようである。たとえば、前者が「人面十相」として「大貴人・富祐・弥寿・貧賤・夭殤・暴悪・孤独・薄俗・盗賊・婦人」の十相を掲げるのに対し、後者は「人相八相之圖論」として「厚相・威相・清相・古相・孤相・

薄相・悪相・俗相」の八相が掲げられる。頭部に関する記載も共通点は見いだせるものの、相違点も多い。

●『安倍晴明物語』巻下「一　頭部」

頭は、一身の尊にして、百骸の長たり。諸陽のあつまるところ《割書略》五行の宗まるところ《割書略》一身のうへには、高きところありて、天の徳をかたとれり。此故に骨ゆたかに立て、中高にみゆるをもつて、頭のよき形と名づく。頭の皮厚きは、衣食ともしからず。皮うすきは貧窮なり。頭に肉角あるは、大富貴の相なり《割書略》耳の後に骨あるを、寿骨と名づく、此骨たかく立たるは命ながく、陥たるは命みじかし。[8]

●『人相小鑑大全』巻二「頭論　并　髪鬚の相論」

頭は一身の尊。百骸の長五行の宗たり。高に居して。まとかに天の徳を。つかさどるといへり。かるがゆへにそのほね。ゆたかにして。明なるは命ながし。中ゆたかに。皮あつく。中たかきは。冨貴なり。頂の中だかに。ひかりあるは。貴人なり。落入て皮うすきは。貧賤にして短命なり。額の中に肉。こぶのごとくにあるは。大貴人。出家なれば。天下の能僧たり。當時百丈禅師の法子。黄檗禅師は身の長七尺ありて。額に角ごとくに。肉出たり。是圓珠といふて。貴相なり。いただき右の方へ落入たるは。母をそんず。左のかたへ。おち入たるは。父をそんず。耳のうしろに。ほねあり。名て。寿骨といふ。そのほねたかく成たるは。命ながし。落入たるは。命みぢかし。

両作品ともに論旨は似通うが、『安倍晴明物語』の方が簡潔である。とはいえ、『人相小鑑大全』が『安倍晴明物語』の本文を参照にしたとは到底考えられない。

『人相小鑑大全』の著者「喜多村氏江南軒」及び序者「難波散人」については、詳細不明。貞享元（一六八四）年八月刊。初版は大坂敦賀屋九兵衛単独版であったが、後印本では江戸山崎金兵衛との相版となった。本稿で紹介するのは後者である。刊記に修訂は加わったが、版木は変わっていない。というのも、本書の影印を紹介した『江戸庶民文庫』7所収小泉吉永氏所蔵本は敦賀屋単独版だが、[9]本稿で翻刻紹介する相版の本文版面とカスレや匡郭の欠け目まで一致するからである。

観相書の記述の文学作品への波及あるいは反映については、青山氏の論考[10]に京伝の黄表紙作品のパロディに至るまで例示されている。『人相小鑑大全』に絞れば、その刊行時は井原西鶴が浮世草子作品を相次いで発表した時期に該当する。たとえば、『武家義理物語』（貞享五・一六八八年二月刊）「黒子は昔の面影」（巻一ノ二）において、明智十兵衛（後の光秀）が十一歳の時に婚約した近江国沢山の某氏の姉娘が不幸にも疱瘡を患い容貌が醜くなったために、妹娘が代わりに嫁入りするが、それを見破ったのは十兵衛が幼い頃に見た黒子の記憶であった。「咎むる程にはあらぬ黒子一つ」が「耳のほとり」[11]にあったのを覚えていたのである。十兵衛の視線を感じた妹は身代わりを告白し、十兵衛は約束通り姉を迎える。その姉は「武道の油断をさせ」ない賢女で、十兵衛の出世を助けたと結ばれる章段であるが、何故十兵衛が「耳のほとり」の黒子を気に留めていたのかといえば、『人相小

鑑大全』によると、その位置の黒子が「男女ともに。両の耳にあるは聡明にして知恵ふかし」と「聡明」や「知恵」に関わるからだったかもしれない。さらに同書「女人面痣之圖」（巻二・十七ウ）の向かって右側の耳の近くのホクロには「敬夫」とあり、あるいは姉が十兵衛に軍略上の忠言を加えて甲斐甲斐しく仕えた姿に通じるかもしれない。もっとも、西鶴が『人相小鑑大全』を実際に読んだか否かは証明ができないゆえ、憶測にとどまるほかないが、観相書での認識が広く普及していた一例ともなりうるのではなかろうか。時代はやや下って、江島其磧『世間娘気質』（享保二・一七一七年八月刊）「男を尻に敷金の威光娘」（巻一ノ一）では、「見る物魂をうしな」うほどの器量よしであった室町の呉服屋の娘が新町の酒屋に嫁ぐのだが、乳離れをしておらず破談になるストーリーである。その彼女は「三十二相打そろふたる美人微塵疵気のなひ様子」[12]で、先の十兵衛の妻と対照的に、ホクロ一つない完全な美形がかえって災いしたとの認識が持たれていたとも解しうる。

浮世草子作品における人相の描写は勿論、右の例にとどまらない。先述したように、影印紹介はなされていたものの本書は未だ翻刻がない。本誌のみならず広くｗｅｂで公開することで、文学研究との相乗効果を期待するものである。

〔注〕

(1)引用は、芳賀登監修『日本道徳教育叢書』第3巻（二〇〇一年・日本図書センター）に拠る。

(2)近衛典子「『雨月物語』の当代性―夢占と鎮宅護符―」（『上田秋成新考　くせ者の文学』二〇一六年・ぺりかん社）。

(3)相田満「観相をめぐる言説」（『アジア遊学』第118号　二〇〇九年一月）。

(4)青山英正「古典知としての近世観相学―この不思議なる身体の解釈学」（『アジア遊学』第155号　二〇一二年七月）、同氏「近世日本観相書版本目録」（『明星大学研究紀要　人文学部・日本文学科』第二十一号　二〇一三年三月）。

(5)(4)同稿。

(6)和田恭幸「『安倍晴明物語』の世界」（『国文学解釈と鑑賞』第67巻6号　二〇〇二年六月）。

(7)(6)同稿。

(8)引用は、『仮名草子集成』第一巻（一九八〇年・東京堂出版）に拠る。

(9)『江戸庶民文庫』7（二〇一二年・大空社）。

(10)(4)同稿。

(11)引用は、広嶋進校注・訳『新編日本古典文学全集』69（二〇〇〇年・小学館）に拠る。

(12)引用は、長谷川強校注『新日本古典文学大系』78（一九八九年・岩波書店）に拠る。

三、『人相小鑑大全』翻刻

翻刻底本とした浜田架蔵本の書誌事項を以下に掲げる。

【書誌】

表紙・書型　藍色無地。二二・六×一六・一糎（替表紙）。半紙本三巻合一冊。

題簽　後補題簽無枠「人相小鏡大全　完」（墨書）。一七・九×三・

三糎。

版心　「序　一」、「人相小鑑目録上　二」、「人相小鑑巻一（〜九、十ノ十五、十六〜十九）」、「人相小鑑巻二　一（〜十九）」、「人相小鑑目録中　一」、「人相小鑑巻三　二（〜二十）」、「人相小鑑目録下　一」、「人相小鑑巻四　二（〜十五）」。

紙数　全六八丁（遊紙〇）。

行数　序文半丁十行、本文半丁十二行。

刊記　（巻四・十五ウに）「貞享元甲子歳仲秋上旬／書林／江戸山崎金兵衛／大坂敦賀屋九兵衛」。

【翻刻凡例】

一、浜田架蔵本を底本とした。

一、漢字の旧字・異体字・俗字は、原則として、底本の字体に従った。

一、清濁・振仮名は底本に従った。句点は底本に従ったが、読みやすさの便を図って適宜補った箇所がある。左訓は該当する箇所に続けて（　）に示した。

一、底本の丁移りは「』（二オ）」のように示した。

一、『江戸庶民文庫』7所収本により、校合を行った箇所がある。

【翻刻】

人相小鑑大全序

それ人のそうがふを見るに。先ほねすぢの肥瘦五行三停之長短の計。面部の盈虧を察し眉目の清秀。神氣の。栄枯を看手足之厚薄を取。鬚髪の疎濁身材之長短を量。五官のなす事有を考へ。五岳之歸朝と倉庫の豊満陰陽の盛衰を見。又威と儀之有無を計。形容之敦厚辨じ。氣色之喜滞をかんがへ。體と膚之細膩。頭之方員頂之平塌骨之貴賤骨肉之せいりう氣の短促声の『（一オ）響心田之好夕。ならひに部位流年によつて。骨格形局をして。断り時に随て趨奉し家に傳にかくる事あるべからず。只星宿冨貴貧賤壽夭窮通栄枯得失流年の体咎におゐて備に皆週蜜なれば。人を相する所萬に一失なし。学者又よろしく。詳にして。真妙を推しもとむへき者也。時而天和四甲子孟春日難波散人書』（一ウ）

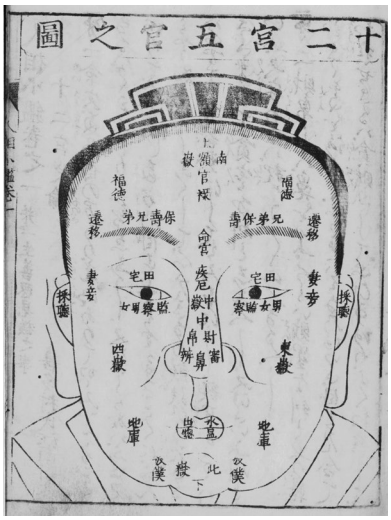
人相小鑑大全目録巻上

▲十二宮五官圖論之事
▲五嶽圖論之事
▲四学堂圖論之事
▲八学堂圖論之事
▲六府三才三停之事
▲人面総論并三相所主之事

巻之二目録

▲人面六曜五星之事』（二オ）
▲頭之相論之事并吉凶之圖
▲髪之論之事并善悪見様
▲頚之相論并吉凶之事
▲八相之論并冨貴貧賤之事
▲同八相之圖之事
▲額之論并善悪見様之事
▲面紋善悪論之事

▲枕骨善悪論之事
▲痣之善悪論同圖相論之事『（二ウ）



（三オ）

人相小鑑巻之一并二生善悪見様之事

喜多村氏江南軒述

十二官之論

▲第一命宮。両の眉の間なり。光明ありてかゞみを見るごとくなるは。がくもんありて。智恵ふかし。又たいらか成は。ふくとくありて。命なかし。両方の目すゞをはりたるごとくに。ふんみやう成るは。かしこくして。心たんきなり。額のひらきたるは。心やさしく冨貴にして。よろずによし。額中ひきゝは。さだまりて。貧寒なりとしるべし。又ひたいに川といふ。文字あるは。親かう〳〵の人なるべし。

▲第二財帛とは鼻をいふ。くらい財星なりといへり。鼻ひきゝ處をろんず。しかればはなのあいだ。目と見合て相應せざるは貧賤にして思ひ事あり。よく相應して。『（三ウ）ゆたかなるは。ふうきなり。鼻のあいだ。ひろきは。さきに仕合よく。後にまづしきなり。さるのはなのごとくなるは。ひんにして。思事たへず。色あかきも。心ちいさくおもふ事かなはず。はなのかく成るは。住所さだまらず。色のくろきは。おやの跡しきをとらず。たとへばすこしありても。うしなふなり。つゝしみてよし。

▲第三兄弟とは。両のまゆをろんず。眉ながくして。目をすぐるは。きやうだい三人あれども。不縁なり。其身の仕合は。よく思ふ事も。かなふ。兄ならば弟をあはれむべし。まゆ三ケ月のごとくなるは。心ゆたかにして。学者となる。此人は出家のゑんありて。かいぎやうをたもつ。眉のかしらあがりたるは。心をふどうにして。口舌をこのむ。』（四オ）まゆのいろあかきは。ちゝはゝにも。はやくはなれ。子にも。ゑんうすし。但女ならば。男にゑんなし。まゆ毛うすきは。他國の商又は奉公を。のぞみて吉。又まゆの短のびざるは。命みぢかし。長ゆたかなるは。冨貴にて長命なり。まゆほそきは。心けんどんなり。つねに観音の信すべし。

▲第四田宅とは。位。両のまなこをいへり。目の内あかくして。あざやかなるは。親のゆづりの財宝を。中年にうしない。おいて苦労すべし。眼うるしをぬりたるごとくなる人は仕合もよく。思ふ事かなひて。心のまゝ成べし。めとまゆのあいだのあきたる人は。貴して義ありて。知行を取高名すべし。眼のまはりあかき人は。病たへず。目の内くろくあざやかなるは。心すなをにして。なさけふかし。さりながら』（四ウ）住所さだまらず。眼きよく。分明なる人は学文ありて。忠信

あり。出家武家はいよ〳〵よし。眼出たる人は。父母のゆづりの金銀うしなふて孝行になし。武家なれば。けんくわなどをして。死すべし。女は産の道にきづかいあり。出家はくるしからず。つねによく。佛を念じ神をまつるべし。

▲第五男女とは。両方のまなこの下をいふ。是を涙堂共いふ。平にうるはしき人は。福徳ありて子孫繁昌すべし。目のふちあつきは。姪欲ふかし。よく慎てよし。るいだうひきゝ人は。貧賤なり。又るいだうにほくろあるは。年おいて。くろふあり。男女共に。観音不動を信ずべし。又たいらかなるは。仕合よく思ふ事かなふ。眼の下に。卧といふ文字のあるは貴子をもつ。則出家になして。よし。天下に一人』**（五オ）**の知識となる。又在家にても。ゐんよくをつゝしめば。智恵ふかく仕合よし。又へらにてそひだごとくなるは。親に不孝なり。是も兄弟にゐんなし。

▲第六奴僕とは。頬の両脇をいふ。まるくふくやかなるは。仕合よし。さりながら。能口をたゝく人なり。男女共に。口ゆへそんしつあり。年よりては。いよ〳〵よし。口四の字のごとく成は。冨貴にして。学文あり。つゐに位にのぼるべし。頬。とがりたるは。貧賤にして。心に徳あり。色黄なるは。下人牛馬に。ゐんなし。白くろき人は。あひきやうありて。ふくとくあり。頬ゆたか成は。命ながし。

▲第七妻妾とは。眼のすこし脇。たゝかほの上をいふ。是を奸門ともいふ。ひかりありてうるはしきは冨貴にして。命』**（五ウ）**ながし。なんによともに。夫妻にゐんふかく。福徳あるべし。古人云。おとこなれば。妻をとりて。金銀財帛家に盈。おんなならばくらひなくして

も。四徳ある男にそふべし。奸門ふかくおち入たるは。男女共に。夫婦のゐんさい〳〵。かわるべし。目のわき大きなるは。かならず。年よりて悪死す。女なれば産の道にて。命あやうし。かんもんあかく黄成は。知恵ふかし。さりながら姪欲ふかくして。あしゝ。奸門分明にうるはしきは。男はよき女をもち。女もよき男にそふ。惣じて。男女ともに。面満月のごとく成は。子に大名か又は天下に名ある出家を持。おもてあかきは。男女ともに。口舌あり。黒白（くろくしろき）なるは。愁おほし。うすぐれなひのごとく。すこし黄なるは。なんによともに。ふうきにて命ながし。』**（六オ）**

▲第八疾厄とは。両のまゆの。あひだの下のひきゝ所をいふ。是をなづけて。命宮といふ。ゆたかにして満たるは。福徳有て。知恵さいかく也。貴人ならば学文ありて能書なり。明に光あるは。命ながく。五福ともにそなはりてよし。されども中年より前に病あり。心するどなれば。命おわるまで。苦労たへず。氣だてそうぐ〳〵しくて。さだまらざる也。平に光あるは。災なく。福徳もあり。但親に早はなれ兄弟には縁有。

▲第九遷移とは。まゆの角也。なづけて天倉といふ。明に光ありて。うすかうばい色なるは。うれいなく。福徳あり。又たいらかなるは。年よりて。親類の跡しきを取落入たるは。年老て思ふ事かなはず。まゆとひとつに成たるは。主人貴人の。氣にいらず。女は男にゐんなし。天倉に角』**（六ウ）**あるは命短。明にうるはしきは。他國あきなひしてよし。古郷は。相應せず。天倉ひきゝはたびへ出て。馬舩の上を慎べし。色青きは。ぬす人におふて。財宝をうしなふ。つねに心に

氣づかひたへず。色うすぐれなひのごとくにて。ゆたかなるは。福徳ありて。喜事おほし。此段は口傳あり。次の巻の眉の部を見合知るべし。

▲第十官禄とは。上額をいふ。此所たかくして。角いたゞきたるごとく成は。貧賤なり。又落入たるごとく見るは。心にとくありて。口舌たへず。思ふ事おほし。平にして。たとへばかんなにてけづりたるごときは。男女共にきうせんにかゝりて死す。よく〳〵つゝしみて。信心のおこしてよし。心入れによりて。難をのがるべし。圓して。玉を見るごとくにて。ひだりへ』**（七オ）**よりて。ちいさき痣あるは。冨貴にて命ながし。色青きは。うれひあり。あかきは。口舌たへず。うすあかく。ゆたかにひかりあるは。冨貴にして。親に孝行なり。

▲第十一福徳とは。両の眼の上。わきのかたをいふ。たひらかにして。まゆのはへかゝりたるは。冨貴なり。きわめて。くぼきは。貧賤なり。まゆよりたかく。角のことくにみゆるは。心短して。ぬすみの心あり。福人ならば。うそをつき。下人にゑんなし。子に悪人ありとしるべし。眼のきは。うつくしきは。心ざしふかく。出家をうやまひ。信心の人なり。眼のうへより。まゆの中まで。青すぢ有は。愚にして。一生やまひたへず。色あかきは。つねに酒宴ゆふきやうをこのむ。うすぐれなひのごとくしかも赤なきはことの外よし。

▲第十二相貌とは。五嶽といふて。面に五つ。大事の相あり。』**（七ウ）**五つとも具足したるを。貴相といふ。此人は福徳圓満にして。そうめいなり。三停といふて。三つの相あり。三停の事は次に見へたり。

〇五嶽とは。一つに東嶽左の。ほさきの事。二つに西嶽は右のほさき。三つに南嶽とは額。四つに中嶽は両方のまなこの間。はなのうへひきゝ所。五つに北嶽とはおとがひ。是五つの大事也。相を見るに。まつ五嶽を見。次に二停を見る。ほねあらは成は。よろしからず。五嶽三停の色。うすかふばいのごとく成は。冨貴にして。親に孝行なり。五嶽三停相應したるは。父母命ながし。其身も知恵ふかく。しやはせよし。色黒白（くろくしろし）にして。相應せざるは。父母の命みぢかく。其身もやまひおほく。愚痴なり。十二宮。五官。五嶽。三停のかたち。なき人は。悪人にして。天下の法をやぶり。親に。ふかう』**（八オ）**にて。あしき名をとり。身をほろぼすなり。

▲貴賤見様の事

それ人の貴賤は。頭（かしら）と眼と二つを持て。たひすうとして見る。まつ。かしらのまろきと。角なるとを見。次にまなこの黒白を見るべし。さてかしらのまろきは貴なり。目分明（あきらか）なるは。慈悲ふかく。仕合もよし。眼の玉いでゝ人を見るににらむごときはあく心ありて。人をねたむ。中年すぎて。仕合あしく。惣じてまなこの色青きは。口舌ありて。やまひたへず。目のまはり。うすぐれなひのごときはよし。黒きは。おろかにして。命みぢかし。眼の下に。肉なく落入たるは。大きにわろし。身こゑて。額ちいさく。眼ほそきは。病たへず。口舌おほし。次の巻（まき）眼の部に審なり。』**（八ウ）**

▲四学堂論

▲第一学堂とは。眼の事なり。ながくして。清すゞやかなるは。冨貴にして。くらひたかし。町人は愛敬ありて仕合よし。

▲第二禄学堂は。額の事なり。ひろくながきは。ふうきにして。命ながし。せばく。みぢかきは。貧賤なり。

▲第三内学堂とは。上下の歯をいふ。かたく大ひにして。よく。そろひたるはよし。武家は。忠信あり。出入ありてむかふば。外へそりたるは。下賤の相なり。歯の色黄なるは能いつわりをいふ。人なるべし。

▲第四外学堂とは耳より壱寸まへをいふ。ゆたかにして光明あるは。冨貴にして。知恵ふかし。又くぼくなりて。色青黒なるは。貧寒にして。愚痴なり。たかきはたんき。』**（九ウ）**にて。ゐんよくふかし。つゝしむべし。

▲八学堂論

▲第一高明部学堂とは。額の事なり。まろくして平なるはよし。あるひは。異相のあるは。一げいあるなり。

（九オ）

▲第二高廣部学堂とは。高明の下也。あきらかに見ゆるは。心きよく。冨貴なり。出家武家は。いよ〳〵よし。

▲第三光大部学堂とは。高廣部の下也。平にして。明成はよし。

▲第四明秀部学堂とは。眼の下なり。黒きは病おほし。口舌あり。上のふちあつきは。姪欲ふかし。豊成は。冨貴なり。

▲第五聰明部学堂とは。両の耳なり。あつく大きなるはよし。うすくちひさく黒きは。皆貧賤の相なり。次の巻耳の部に。くわしく見たり。』**（十ノ十五オ）**

▲第六忠信部学堂とは。鼻の上下口ひるをいふ。うすきは男女共に言多し。あつくそりたるは下賤にて貧寒□。鼻と口と両の間。ひろく脇へ開たるは。冨貴にして。知恵あり。

▲第七廣徳部学堂とは。口びるの下おとかひの。すこしうえなり。是まで舌とゞきたるは。冨貴にして。智ゑ有。短はわろし。

▲第八班笋部学堂とは。両の眉の上也。まへの兄弟の部に。審にべんずるなり。よく見合しるべし。

右四学堂八学堂は。是皆人面の名なり。一々是に合たるはよし。此相を具足せざる者は下賤也。鼻の上あかきは苦労たへず。此内の相皆尖たるは悪し。上高明より。下廣徳部に至るまで。相應したるを。冨貴の相とす。是には口傳あり。よく次の下の巻と見合て相すべし。』**（十ノ十五丁ウ）**

（十六オ）

▲六府三才三停之圖論

六府とは。先両のほふぼね也。是を顴骨といふ。両方のおとがい是を頤骨といふ。両の眉の上是を天倉といふ。此六ところなり。古人云上の二府は両の天倉をいふ。中の二府は両の顴骨をいふ。下二府は両の頤骨をいふ。六府は此六つをいふなり。秘訣にいわく。天倉のゆたかなるは。冨貴にして。親に孝行にて。兄弟に縁あり。せばく短は下賤の相なり。天倉と耳とのあいだ。遠はよし。ちかきは貧賤なり。又ほうぼねのたかきは下賤なり。とがりたるは心じやけんとしるべし。分明にゆたかなるは福徳ありて知恵ふかし。いこつ。くほく成て。みぢかきはおもふ事かなはず苦労おほし。ながくゆたかに面の色うすかふばいのごとく成は福徳圓満にて命ながく思事なく心豊也。』**（十六ウ）**

▲三才三停論

三才とは。一に額を天といふ。二に鼻を人といふ。頦を。地といふ。是てんじんちの三才なり。額ひろくして。圓はよし。鼻のあいだ。すこしなかきは寿命ながし。頦の間せばきはよし。尖たるは悪相。よく上下相應したるはよし。

三停とは。一に額を上停といふ。二に鼻を中停といふ。頦を下停といふ。是三ていなり。じやうていながきは。聰明にて福徳あり。ちうていながきは。貴人にて思ひ事なし。下停ながきは。一生半吉なり。右三停同からぬは。貧賤也。じやうてい高きは。学文するによし。中停みぢかきは。中年に病ありて命あやうし。下停ゆたかにひかりあるは。しんるいと中よく。田地をもちて仕合よし。さりながら。子』**（十七オ）**にゑんうすし。羯子すべし。

三相所主

頌云

身に三相あり。頌をもつて。しめす心を付て。見るべし。

額尖初主レ災　鼻歪中主レ逆　欲レ知ニ晩景事一　地閣喜ニ　方高一

三柱頌

頭為ニ壽柱一　鼻為ニ梁柱一　足為ニ棟柱一

身三停論相

身の三停を。分に。まづ頭を上停とす。身こへて。せいひきゝ人の頭大きく長きは少年の内。福徳あり。中年すぎてより。貧苦あり。身のながく大きにして頭の短小』**（十七ウ）**なる者は。一生貧賤なり。肩より腰を中停とす。間ながきは。福徳ありて。命ながし。腰ふとくして。座するとき身も腰もうごくは貧賤にして。みぢかし。腰より足

を下停といふ。上停と中停と同じからずして。ながきは病ありて。口舌たへず。上中下の三停。長大短小ひとしからずは。短命の人なり。一身の三停皆相應したるは。男女共に形うつくしく。福徳あり。古人云 此段の相するに上停長はよし。下停ながふして。身のうすきは。貧賤なり。他國のすまひ。舩の上の商をのぞみてよし。身みぢかく。脚ながきは。一 生流浪す。上長下 短はよし。上短下長きは下賤なり。惣じて身乾かれたるは。貧にして。命みぢかく身躰さい〳〵かわるべし。上中ながく』**（十八オ）**下短は冨貴にてよし。

人面之總論

人の相はまづ面部を本とす。面すなをにして。ゆたかなるはよし。一身のとくしつを面にあらはすなり。かるがゆゑに。五嶽三停もみな人面の好相なり。おもて色うすぐれなひのごとくにて分明成を冨貴の相とす。面なのめならず。傾側鈌陥たる四相は貧賤の二相なり。かるがゆへに。面の色白してにごり。油のごとく。又うるしの色のごとくひかりあるは。冨貴なり。おもての色赤にわかに火のごとく成は命短とんしする相なり。面色かれ寒氣ならざるにさむく。見ゆるは。貧下相也。面の色あをくあひのごとく見ゆるは。心に毒ありて。人をそこなふべし。面に三拳』**（十八ウ）**とて。角たつて。かゞみたるごとく。見ゆるは。男は妻子を害す。女は男をさまたぐる。男女共ニよくつゝしみて大信心のおこし。一代のまもり本尊をたつとみて吉。面満月のごとく。きよくゆたかなるを。名付て朝霞面といふ。男ならば。公家武家か。町人ならば。庄屋年寄か。なににても。物のかしらと成相。女は美人にて。公家大人につかへて。貴人の妻と成。前生に三宝を供養し。人に善根なしたる因縁ゆへ。此世にも。なを〳〵信心ふかく。心すなをなり。おもて。皮あつくうるをひあるは冨貴なり。かわうすくかわきたるは。貧なり。身こへておもての瘦たるは。命ながく。生れ性しづかにして。物にさわかず。ゆふ〳〵たり。身やせて。おもてこへたる人』**（十九ウ）**は。命みぢかし。おもての色白身黒きは。下賤なり。おもてくろく身白は。貴人の相にて仕合よく病もなし。おもてうりざねなりしたるは。冨貴にて。ゑひぐわの相なり。おもて。少あおく瓜のさねのことときは。かしこき相。おもて。ながふしてしかくに。上下とがりて。棗の実のことときは。貧賤なり。ほふぼねに。寿といふ。文字ありて。耳に入たるは。冨貴にして命ながし。髪たかくせばきは。孤となりて。苦労あり。おとがひ開たるは。福徳ありて。人にうやまはるゝ。上下あぎとのほね大くひらきて。耳のうしろに見ゆるは。心に悪毒ありて。人を害す。』**（十九ウ）**

人相小鑑巻之二

人面六曜五星に當事

六曜五星に。あたるとは。頭は火星。鼻は土星。左のまゆは羅睺。右のまゆは。計都。口は水星。左の眼は。大陽。右眼。は。大陰。左の耳は。金星。右の耳は。木星。まゆの中を紫炁。山根を月孛（ほし）。これを六曜五星といふ。〇鼻ばしら。たかき人は。冨貴にして。位あり。面すくやかに見ゆるは。中年に心に思事あり。おとがひ。まろくゆたか成は。田宅おほく持。額ひろくたひらか成は。子孫繁昌なり。又云面あらく身ほそきは。福人なり。面ほそく身あらきは。一生貧髪げに。油けなくこわきは。一 生義なく慈悲なし。能慎てよし。

頭論并髪鬚の相論『（一オ）

頭は一身の尊。百骸の長五行の宗たり。高に居して。まとかに天の徳を。つかさどるといへり。かるがゆへにそのほね。ゆたかにして。明なるは命ながし。中ゆたかに。皮あつく。中たかきは。冨貴なり。頂の中だかに。ひかりあるは。貴人なり。落入て皮うすきは。貧賤にして短命なり。額の中に肉。こぶのごとくにあるは。大貴人。出家なれば。天下の能僧たり。當時百丈禅師の法子。黄檗禅師は身の長七尺ありて。額に角ごとくに。肉出たり。是圓珠といふて。貴相なり。いただき右の方へ落入たるは。母をそんず。左のかたへ。おち入たるは。父をそんず。耳のうしろに。ほねあり。名て。寿骨といふ。そのほねたかく成たるは。命ながし。落入たるは。命みぢかし。大陽の穴とて。左の眼の事なり。此大陽二骨あるを。名て扶桑骨といふ。耳のうへ』（一ウ）にあるを名て玉楼骨といふ。二つならびてあるは。大冨貴の相なり。又坐する時。頭うしろへ。あをのきて。居するは貧賤の相。髪のあいだたるゝは愚にして。命みぢかし。髪のあいだ高は。心やわらかにして。命ながし。髪黒して。みぢかく。うるおひあるはよし。かしら。ちいさく髪ながきは。他國に。住所する也。髪黄にて。こがるゝごとく成は貧て。命みぢかし。髪みちかくしてこわく針のごとく成は。性つようして。じやけんなり。又あかくみぢかきは。たん命。かしら。ちいさく。くびながく。髪耳まではへかゝるは。みな貧賤の相にて。老うへにおよび死すべし。髪若年の内より。白なるは。悪。又おゐて二度黒なるは。命ながく仕合よし。額たいらか成は。かならず。冨貴なり。かしらの内に角ごとくにあるは。心たけくし』（二オ）て。仕合よし。うへ尖。したながきは。貧賤の相なり。ひたい。下へたれて。ゆたかなるは。賢人なり。女ならば。賢女にて。びじんなり。髪に油氣なく。ちゞみまきあがりたるは。男女ともに。人を妨ぐる相なり。つゝしみてよし。かしらのうちに旋ありて額にたれ。頂にありて。つじ多きは男女共に。ゐんよくふかし。つゝしみてよし。〇人げんの髪を山岳の草木に。かたどるに。其草木さかんなる時は。蔽明ならず。うつして。清からず。かるかゆへに。毛髪は蜜にして。ほそくみぢかくして。うるをはん事を。ねがふ。黒して色ひかり。やはらかにして。にほひよきは。みな冨貴の相。髪の色黄にしてちゞみたるは。一切の事に。さまたげをなす。その身も一生苦労たへず。悪髪なり。髪あかき人も。わざわひ。』（二ウ）たへず。髪あらくこわきは。性つよふして。慈悲心なし。むすぼふれて。あしき香のあるは。貧賤の相なり。鬚のなき人も。毒心あり思事もたへず。髪ひたいにはへかゝり。たるは男女ともに。母をさまたげ妻子を害す。かみひげばら〳〵として。うるおひなき人は一しやう食物にとぼしきなり。ひげかみに。あぶらをつけても。水を付てもはやくかわくは苦労たへず。かみにうるおひありて。ほそきは男女ともにくらひあり。又黒やはらに糸のことく成も仕合よし。四十よりうちに髪しろく成るは。血おとろふといふ。此人は命みぢかし。毛髪諸人の目に。すごく見て。蝟の毛のごとく成は。子となりても。親にふかふ。臣下となりても。ふちうなり。是あく髪なり。』（三オ）

頸の相論

頭は一心の体上を棟といひ。下を梁といふひかり有て。ゆたかなるを。

冨貴とす。肥たる人。うなじ短は。大きによし。痩たる人の項長はよし。あるひはなはだ。ながくして。つるのごとく。あるひは又みぢかくして。いのしゝのくびのごとく。あるひは大きにして。まる木のごとく。あるひは小して。中ふとく。うへしたほそきは。みなこれ不合の相といふて。あしゝ。くびのまわりに。こぶのごとくあるは。肥たる人はわざわひあり。やせたる人はくるしからず。いたゞきにすじありて。ほそきは命ながし。短して。まへにさがりたるは。ふくとくあり。ほそくして。ながきはきはめて。ひんせんなり。まがりたるも。ひんくおほし。じねんに』**（三ウ）**まへに。かたむきたるはよし。うしろへ。のりたるは性弱（よはし）にしてあしゝ。頸立たゞしく。すなをなるは。性たゞしうして。さひわひあり。薄側馬のごとく成くびのものは。人にさまたげをなす。むまれなり。圓疊（まろくたゝみ）にして。ころもの袖のごとくなるは。冨貴にして。命ながし。くびまがりて。へびのごとくなるは。心に毒あくありて。しかもまづしきなり。まとかにながく。つるのくびのごとくなるは。心きよくして一生ひんなり。されども。つねの貧にはあらず。こゝろざしを。きよくまもりて。世をへつらはず。もろこしの。伯夷叔齊のたぐひなり。まろくこへて。つばめのごとくなる。くびのものは貴人なり。項かしらより。ほそきものは。まずしふして。たんめひなり。うなじたつ』**（四オ）**て。おもてにそうおふしたる人は。命なかく。清貴（きよくたつとみ）にして。賢人のごとくなり。こへたる人うなじ短。やせたる人のながきは。年をへてより。その名。よもにきこへてよし。此人かならず。こきやうをさりて。われと出世して他國に。住居するなり。』**（四ウ）**

一云厚相

そのかたち。つよくして。福徳あり。此人は心あつく。よく大氣にして。貴人高人とまじわりても。心少もおくせず。たとへは山のごとく。大舩のごとし。引ども来ず。うごかせども。動ぜず。老年にしてなを〳〵よし。』**（五オ・上）**

二云威相

此相いせひありて。一生人にしたがわずして。物のかしらと成べし。人にうやまわれ。おそるゝなり。人よりあなどらるゝ事なくして。慈悲ふかく。下々を[ママ]あれみすへはんじやうにてゑひ花なり。』**（五ウ・上）**

三云清相

清とは。心きよく。たましひ。たかくひいでゝ。ちりにまじわりてもそまらず。たとへば。玉のごとく。蓮（はちす）のごとし。泥中（どろのなか）より出て。泥にそます。事にのぞんで過不及ならず。中をうけたる相。是聖賢の相とも。いふ

（五オ・下）

（五ウ・下）

（六オ・下）

べし。』**（六オ・上）**

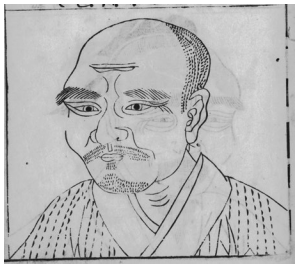
四三云古相

古とは。いやしからずして。心しはく愚痴にて。一切に。きずかひたへず。物事に分別して。しかも。よきふんべつもなく。人より。うとまるゝ相なり。よく〳〵つゝしみて。心得べし。』**（六ウ・上）**

（六ウ・下）

五云孤相

孤といふは。仕合。よからず。妻子なく。一生苦労ありて。思事たゑず。たとへば。雨の中の鷺。ともをたづねて。立てるがごとし。されども出家しては。みし。大信心のおこし。観音不動を。念ずべし。』**（七オ・上）**



（七オ・下）

六云薄相

薄とはかたち。よはく氣よはく。心うすく一生あやうき事おほし。たとへば大海のうへに。一葉（は）をうかべたるがごとし。よくつゝしみ。信心すべし。舩の上を心得べし。口舌たゑず。まずしきなり。』**（七ウ・上）**

（七ウ・下）

七云悪相

悪とは。親に不孝にて。つねに殺生を好人を害す。一生心にあくじをたくみ。人をなやます。さるによりて。わが身も。皮をやぶり。骨をくだき。一身あやうし。よくつゝしむべし。是あく相也。』**（八オ・上）**

（八オ・下）

八云俗相

俗とは。下賤の事也。心にごりて清からず。いやしき。いとなみをする相なり。たとひ衣食ありても。用る事ならず。されども心はりちぎ成べし。右是八相なり。男女ともに此通に見分に違あるべからず。よく〳〵考べし。』

（八ウ・上）

（八ウ・下）

冨相

冨相とは。かたち。あつく。神やすく。氣きよく。音声わうしきにて。項大に。ひたいたかく。眼あきらかに。まゆひろ

（九オ・下）

く。耳あつく。唇くれなひに。鼻すぢとふり。面しかくに。背あつく。腰たゞしふして。皮うるほひ。腹だれ。歯なみよく。色白して。万事豊成は財宝おほし。』**（九オ・上）**

（九ウ）

貴相とは。十二宮五官。四学堂。八学堂。六府三才三停。一切相を。具足して。心きよく。形ゆたかに。声しづかにて。慈悲ふかく。心すなをに。身おのづから香。上停長。下停みぢかく。まゆのあいだ廣。まなこ分明にくろく。はなすぢ。すなおにして口四の字のごとく。舌ながく。歯をふきくして。しろく。頬とがらず。耳大きにして。あつく。おもての色。うすぐれなひのごとくにて。形よくなもあいたる。是を貴人とも聖人ともいふなり。

貧賤の相

貧賤の相とは。頭は。ちいさく。額すほり。耳うすく。口ちいさくして。肉ゆるく。かたちいやしく。氣もにごり声のひゞき。われたる鐘のねのごとく。まゆのあひ。せばく』**（十オ）**腰おれて。せなかうすく。脚ながく。かたせまり。物くひねずみのくろふごとく。すゞめのはらのごとく。下かるく。むなしふして。上おもく。むねにほねあらはれ。おもてなつめのさねのごとく。上下とがり。口火を吹やうにて。歯あらはれ。まゆみじかく。乳ちいさく。万長短にてそろわぬは。貧賤の相なり。』**（十ウ・上）**

（十ウ・下）

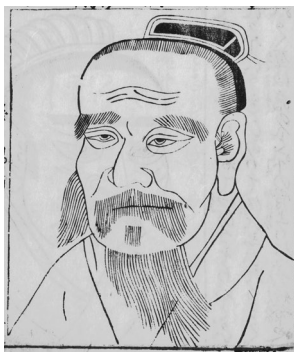
孤苦の相とは。一生みなしごと成て。くろうたへず。詩にいわく。人孤獨なる事は。何によるに。顴骨たかく。氣しつ。せまりて。和せずへんくつにして。おもての色こがれ眉すこしにて。まなこに。くろき所すくなく。いろあかく。鼻のなり。ひらたふして。あな。おふきく。角ありて。口せばく。物くろう事。いのしゝのごとく。耳ちいさくして。うすく。くびうへした。すぼり。中ふとく。肩せばく。身のすぢあらはれ。物事心にかゝり。思事たへず。みなこれ。孤どくの相

（十一オ）

なり。これには。口傳あり。よく〳〵。見合て。相すべし。』（十一ウ）

寿相

寿相とは。命ながきをいふ。詩にいわく。冨貴の相は見やすく。世に見がたきは寿相なり。先ひたひ。ゆたかにして両の眉ながく。ほふぼねのにく多。耳の中に毛はへ眼の内すゞしく。四十過て。眉の毛しらがまじりに。鼻のなり正。頰豊に。歯の色白。耳大きに三停能なれあひたるは。是寿相也。』（十二オ・上）



（十二オ・下）

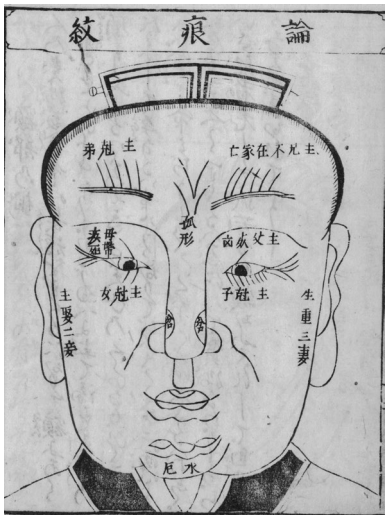
夭相

夭相とは。命みぢかきをいふ。すこし。肥て氣みぢかく。ひたいとがり。眉のあいだせばくして。耳うすく。鼻おぼへずたれ。鼻の中より毛はへ出て。歯くろく。うはば出て。口びるそり。おとがいみぢかく。つねにかほに。うれひありて。酒にゑひたるごとく。形にかげなく身のにく厚皮薄。のんどの下の骨上りたる。是短命也。』（十二ウ・上）

（十二ウ・下）

額部の相

人の貴賤冨貧。命の長短を。わくるにおもて額にあらわれずといふ事なし。かるがゆへに。上て論ず。玉柱の頂に入たるは。たつとき事。天子のくらいなり。ひたいゆたかにして。平なるは。命ながし。おもて。ちいさく。さるの面のことぎは。貧して。命みぢかし。ひたいくぼく。落入たるは。あしゝ。髪下へはへかゝりたるは。愚にして。貧賤なり。かしら。ちいさき者。老して孤苦なり。額おふきにして。面ゆたかなるは。年おひてよし。』（十三オ）

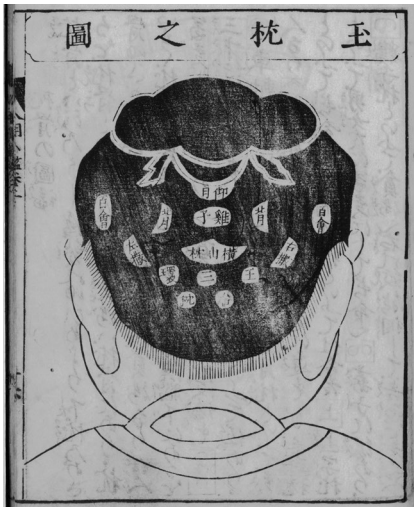


（十三ウ）

痕紋の圖論

額の紋に。貴賤の二相あり。額ひろくして。好紋あるは。冨貴なり。額とがり。鈌くぼみたるは。悪紋にて。いよ〳〵。貧賤なり。偃月の紋といふてくらいのぼる紋なり。[illegible] 是懸犀の紋といふて。武臣の紋なり。[王] 王字の紋は。神主などにしてよし。[illegible] 天桂紋といふて代官などに。なるなり。[illegible] 鶴足紋といふて。一國よりいげ

郷里のぬしとなるなり。三三横の紋といふて。親に。はやく。はなるゝなり。一蛇行紋といふて旅へいでゝ死するなり。井井字の紋といふてじゆりやうをして吉なり。川川字の紋といふ。物おもひ。うれひ事。たへず。あるひは。刑にあふなり。十十字の紋といふて冨貴にして繁昌なり。田田字紋』**（十四オ）**といふて冨貴にして。命ながし。山山字の紋といふて。武家はよし。町人は半吉なり。乙乙字の紋といふて。みやこに居て。禁中の。御用を聞て。仕合よし。女女字紋といふて。何事にても。其名あらはれ。一げいに達する也。右のもんみな。ひたいにあらわるゝなり。心を付て。見るべし。女人に三横のもんあるは。夫に早はなれ。子をさまたぐる紋なり。耳に三紋あるは。聰明にて。知恵あり。眉の上に。紋あるは悪し。目の下に。なみだの。ながるゝごとく。紋有は。慈悲ふかし。目下に横紋あるは。貧賤なり。又は子に。ゑんうすし。額に大字の紋あるは。親かうこうにて武家は忠臣なり。ひたいに。一字の紋あるは。商人はよし。あわれむ心あり。額に毛のはゆるは。男女ともに。さまた』**（十四ウ）**たけの心ありて。親に不孝なり。額の左に。日といふもん。右に月といふもん。此両紋あるは。貴相なり。出家は。天下の大和尚と成る。俗は天子の御前ちかく出仕する人なり。額に一筋ふときすじあるは。心勇にして。百萬の軍兵の大将と成る。額に紋ありて。眉の中へ入。わけ見へずして。紋あるは。貧苦あり。口のはたにもんありて口の中へ入たるは。男女ともに。うへて死すへし。額に川といふもんあるは。冨貴にして。命ながし。顴骨（ほうぼね）に小といふもんあるは。水難にあふて。あやうし。もろこしに。鐘繇といふものあり。いとけなきとき。祖父（ぢい）と同道して洛陽に行に。道に人相を見る人ありて。鐘繇童子を見ていわく。此童子は。聰明にして。よき』**（十五オ）**相あり。さりながら。水にあふて。わざわひあり。つゝしむべしといふ。それより行事いまだ。三十丁にもたらずして。橋をわたる時馬おどろいて。落馬し。水におぼれて。すでに死すべかりけるを。すくいあげ。たすかりたり。それより。いよ〳〵此童子をあはれみ。人相の正き事を。信じて。童子に学文させ。つるに官位にのぼり。世に名をあらはしける。鐘繇が顴骨に小といふ紋あり。』**（十五ウ）**



（十六オ）

枕骨の圖論

枕骨とは。頭のうしろ。髪のゆひめより下。枕の。あたるを。枕骨といふ。しかれば人の貴賤は。枕骨にあり。枕骨ゆたか成は。冨貴なり。落入たるは。貧賤なり。古人いわく。枕骨の善悪しらんとおもわば。

枕骨の脳下にあるを冨貴とし。脳上にあるを。貧賤とす。故に紋論す。○○○三才紋といふて。貴なり。○○○五岳の枕といふて。位あり。◎車軸枕といふて。合よし。◡偃月枕といふて。貴人なり。◇相背枕といふて。文武二道に達す。▽垂針枕といふて。長命也。□酒樽枕といふて。仕合吉。上上字枕といふて。男女共に冨貴にして。長命也。○○妻子に縁あり。◠鶏子枕といふて。貧賤也。右の紋能相して。善悪を考知べし。』**（十六ウ）**

（十七オ）

（十七ウ）

男女痣の圖論并善悪

漢の高祖は。股に七十二のほくろありて。帝王の位にのぼる。凡ほくろの生ずる所に。善あくの差別ありて。吉凶をさだむ。しかれば色の黒はうるしのごとく赤きは朱のごとくなるはよし。うすあをくうす白きはあしきほくろなり。額のうへにほくろ七つあるは貴人也。鼻のあなのうへにあるは。父母をさまたげ不孝なり。男女ともに。両の耳にあるは聰明にして知恵ふかし。学文して。いよ〳〵よし。耳の中にあるは命ながし。右の耳の下にあるはおやに孝行なり。耳の中のたまにあるは福徳あり。眼肱にあるは盗賊の心あり。此ほくろをほりて。血を取綿につゝみ針をさし観音の名号七へんとな』**（十八オ）**ゑ。川にすつべし。つゐに盗賊の心やむべし。両のまゆの中にあるは。冨貴にして吉。さりながら男女ともにたんきにて兄弟にゑんうすし。鼻のあなのはたにあるは。病たへず口舌あり。つねに薬師如来を信ずべし。目のふちのうへにあるは。仕合よし。鼻ばしらにあるは。きみぢかくして。自害などする心あり。つゝしみて吉。人中といふて。鼻のあなにあるは。夫妻にゑんあり。口びるにあるは。貧賤なり。口中の上のあぎと。下のあぎととにあるは。一代食物多し。舌の上にあるは。一生いつわり。きよごん多し。人をたぶらかす。高廣堂にあるは。親に不孝なり。ほふぼねの一寸下にあるは。牛馬。あるひはたかき所より落て。わざわひあり。又のんどの下にあるは。男はつま』**（十八**

ウ）を。がいし。女は男をなやます。むねの下。みそ落にあるは。よく物をおほべて吉。乳より壱寸わきにあるは。思事たへず。苦労あり。わきばらに赤ほくろあるは。仕合よし。背十一のほねの脇。壱寸目にあるは。命みぢかし。くびすぢのうしろにあるは。たんきにて。苦労あり。へその壱寸わきにあるは。夫妻にゑんあり。子に貴人あるべし。股のつけきは。四寸うへにあるは。冨貴なり。同もゝの付ぎは。七寸下。内股にまろく赤●是ほど成。ほくろあるは。親に大孝行の人にて。天下に名をあぐへし。是を聖人とも賢人ともいふべし。唐漢の高祖。御子漢の文帝は。いとけなき時御名恒と申侍り。御母。薄太后に。孝行也。よろづの食物をまいらせらるゝ時は。先みづから。きこし』（**十九オ**）めし心み給へり。御兄弟あまたましくけれども。このみかど程。仁義をおこなひ。孝行なるは。なかりける。此ゆへに。上一人より。下萬民に至るまで。忝思ひ。四百余劦の。天子にかやうの帝。よもあらじと。かんるいきもにめいしけるが。かくのこときのほくろあり。ことぐくは。面の圖に見へたり。よくくく考べし。悪ほくろをほりて。血を取。綿につゝみ針をさし。川にすつべし。つゐに悪事やみて善事と成るべし。

人相小鑑巻之二終』（**十九ウ**）

〔追記〕

『人相小鑑大全』には、人権上の観点から適当ではない表現が含まれているが、原作を尊重し、手を加えずに掲載した。なお、本稿は二〇一七年度秋学期に河戸愛実氏が提出した卒業論文「脇顔の痣　付『人相小鑑大全』翻刻―浮世草子から見る観相学―」に依拠している。

（この稿、続く）

（はまだ　やすひこ　日本文学科）、
（かわと　まなみ　日本文学科二〇一七年度卒業生）

二〇一八年十一月十五日受理